

## 哲学対話 ～ 暴力に抗して

永井 玲衣 (作家・哲学者)

わたしは主に哲学対話と呼ばれる場を、さまざまなおとこでひらいています。学校、企業、美術館、路上、ライブの合間、デモの場でやることもあります。そこでは、つどった人々の問いをききとるところからはじまります。ずっと気になっていた問い、もしかするとどうでもいいと思って押し込めていた問い、ひとりでは担いきれない重い問い、それらをききとっていき、じっくりと深めていくのです。そこで生まれた言葉たちは、生きています。どうしてもそれらを忘れてしまいたくなくて、わたしは書くということをしているのだと思います。手渡されたものを、さらに手渡しておかなければ気が済まないと思うのです。

幼いころから、世界をよく見るとはどういうことなのかということが、わたしの関心ごとでした。あまりに奇妙で不条理なこの世界を、いかに生きることができるのかという切実な問いをどこかで隠し持っていたといえるのかもかもしれません。わたしは哲学書よりも、文学や詩に育てられました。詩人たちの、世界を見る「目」をわたしは追いかけてきました。

ただ、一方的にまなざしを向けることは、傲慢さでもあります。まなざしの相手を凝固させ、認識のもとにおくことができると錯覚することができます。世界と関係するために試みたことが、世界とわたしを切り離すあやうさをもたらします。

哲学者、メルロ＝ポンティはこのように書いています。

「哲学はおのれの足下に世界をうづくまらせているのではない。哲学は局部的な視角いっさいを網羅する「より上位の視点」ではない。哲

学は生の存在との接触を求め、そのうえ、そこを決して立ち去らなかつた人々から学び取っていく。」

わたしは哲学を志すようになったとき、自分の足元に世界をうづくまらせることはやめようと思いました。だからこそ、わたしは世界に根ざしながら、世界をよく見ることは可能なのかという問いにひらかれることになりました。たえず寄せてくる、ままたまなさにどっぷりと身をひたし、触れること。それはわたしにはとても可能とは思えないままに、ひとりで試みられました。

ですが、今思い返しても、それは不十分な試みでした。わたしは現実よりも、本のほうを「ほんとう」にしていました。生々しい他者の手触りよりも、やさしくそばにいてくれる文字のほうが、ずっと心地よかったです。わたしはみなさんが思っているよりも、ずっと臆病でした。

この活動も、決して意欲的にはじめられたものではありませんでした。たまたま友人がわたしをひっぱりだし、異なる他者がつどい、哲学する輪の中に放り込みました。おそろしい経験でした。息が詰まるような、不格好な時間が流れていました。言葉は行き詰まり、目はますます閉じられるばかりでした。ただ、「他者論」を研究しようと大学院への準備をすすめていたわたしは、他者のぬるりとした手触りを思い出しました。そうか、これがそうなのか、と思いました。

小学生のときの林間学校を思い出します。なぜそうなったかは思い出せないのですが、ある夜、真っ暗な林の中を、友人たちと歩きました。闇が自分を侵食するほどの暗さでした。自分が

溶けてなくなってしまいそうに感じられました。しかし、おそろしさに身をふるわせた友人が、わたしにしがみつきました。右腕をつかみ、わたしの顔をべろりと触りました。そこでようやく、自分の輪郭を確かめました。この経験でわたしは、わたしとしてはじめから存在するのではなく、他者によってようやくつくられるのだと、身体で理解したのです。

共に人々と哲学する場は、まさしくそのような時間でした。言葉をぶつけあうのではなく、わからなさに手をのぼしあい、互いをうきあがらせること。あなたがいるから、言葉が生まれるという体験。問われるから、考えられるということ。聞かれるから、話せるということ。すべては受け身のかたちでおこなわれます。もちろん、異なる他者にふれることは、不快な経験でもありえます。おそろしさでもあります。なのに、わたしたちは、ひとりで考えるということさえ、他者がいないとできないのです。これは発見でした。「見る」ことよりもまず「きく」ことが目の前にありました。見るだけでなく、わたしは「よくきく」ことはどういうことなのか、知りたくなりました。

それから、他者に呼びかけられて、さまざまな場でひらく機会を得ました。そこで目の当たりにしたのは、ひとびとはつねにすでに哲学しており、誰もが問いを持っているという事実でした。わたしはずっと哲学は誰のものかという問いに対し、みんなのものであると、すがすがしく応答することができるのですが、それはあまりに無邪気だったとも思いました。そうではなく、わたしは、哲学は誰のものかという問いではなく、哲学は誰のものでなかったのか、という問いを立てなければならなかったのです。こんなにも、わたしたちは考えたいことがあって、問いがあって、ききあいたいことがあって、それなのに、それを妨げているものがある。哲学者自身の語りに、誰が出てこなかったのか。

哲学という試みに誰が関係ないとされてきたのか。どのような言葉に、現場に、ひとに、状況に、哲学はないとされてきてしまったのか。その問いに応答するために、やはりわたしはきくこと、ききあう場をひらくことが必要になりました。でも、どうやって？

わたしたちには考えていることがあります。わたしたちには問いがあります。ですが、それを表現できる場が、はたしてこの社会にどれだけあるのでしょうか？

表現できる場、と、いま表現しました。表現がのびのびとからだをのぼすことができる場は、ここなら表現できると思える場です。また、他者の表現をもっとききたいと思える場です。わたしは哲学もまた、表現だとかんがえています。考えたことを言葉にすることは、そのひとの独自の世界をひらく表現行為です。しかしそれは、繰り返すように、たったひとりで形作られるのではなく、対話という場で異なる他者によって引き出されるものです。そういう言葉は、決して明瞭ではありません。こわれやすく、あいまいで、途上のものです。ですが、いっぺんの詩のように、そのひとのとりかえのきかない言葉なのです。

表現できる場は対話的な場です。対話という言葉はいま、世の中に歓迎されています。ですが、おそれられてもいます。対話が重要と言いながら、対話をしたがらない社会にわたしたちは生きています。ぜひ自分の会社で対話の場を開いてほしいとわたしを呼び込んでくださった方が、自分は外から見ていると輪に入りたいことがあります。対話を研究したいと声をかけてくださった方が、実際に対話の場に足を運んだことがないと言われることがあります。対話をはじめようとすると、逃げられる席はどこか、逃げやすい場所はどこかと聞かれることがあります。わたしはこうした反応をさみしく受け止めながら、まったく否定することが

できません。対話が必要なのに、わたしたちは対話を恐怖しています。なぜでしょうか。

あるいは、対話は軽んじられ、馬鹿にもされています。たとえば政治の場では、対話は理想論であるとされ、「現実路線」と表される安全保障のあり方が選択されます。対話は夢見がちで、考えなしで、現実から目をそむけた、白々しいものだと思われています。何がそうさせるのでしょうか？

また、わたしはこう問うてもみたいと思います。でも、わたしたちはそもそも、対話を試みたことがあったらどうか？対話をつくらうとしたことはあったのだろうか？と。

対話は試みそのものです。わかりあおうと手をのばしあおうとする、つねにすでに共に生きている他者と、ききあうことで、また共に生き直そうとすること。そこには「他者」などと抽象的にあらわされるものはいません。ひとり人間がいます。さまざまな抑圧にさらされながら、押し返すようにして生きるひとびとが、息づいています。わたしたちはすぐに集えなくなってしまうからこそ、わからなさをたっぷりとふくんだ問いが、わたしたちをつないでくれます。

こうして、対話の場をつくることは、対話を拒む社会に対して緊張をつくり出します。対話は絶えざる力の行使によってようやく維持、拡大、深められていくものです。放っておいても、対話は出現しません。だからこそ、試みるものです。

ですが、それは勇ましく、ひとりですすむものではありません。対話の場をつくるよう、たえずいざなってきたのも、また他者によってでした。きかされていない声があり、きかれようと呼びかけられているからこそ、対話は生まれようとするのです。わたしは、呼びかけられ、さまざまな場に足をはこぶことによって、ひとび

とがきき合える場、ここなら生きてもいいと思えることを阻む、さまざまなものに出会いました。わたしはやはり、本のなかだけで生きていられなくなりました。

共に考え、問いをなげかけ、対話をするには、はやすぎる時間の中で、ただ立ち止まる時間というよりも、社会やわたしたち自身の「修復」の意味も持ち始めました。言葉を重ね、生き直そうとすること、集いなおそうとしつづけることが、修復でした。

ようやく、わたしの水中をただよぶような語り、今回のタイトルにかえってきます。今日は「暴力に抗して」というタイトルでお話をしたく、ここに立っているのです。

わたしたちはすでに共に生きているという事実を、ないものにすること、あるいは見ないふりをするもの、それは暴力です。暴力は言葉をうばいます。表現をうばいます。とりかえのきかない考えを育むひとり人間を消しさろうとします。

だから、対話は、暴力に抗することです。哲学は、暴力を拒むことです。

わたしたちはいま、イスラエルによるパレスチナのジェノサイドという、すさまじい暴力を目の前にしています。先に引用したメルロ＝ポンティは、「哲学は生の存在との接触を求め、そのうえ、そこを決して立ち去らなかつた人々から学び取っていく」と書いています。生の存在との接触を求める哲学のあり方とは、けっして共存し得ない方法です。わたしはこれを批判しなければなりません。

それだけではありません。日本政府は高い殺傷能力を持つ戦闘機の輸出を解禁する方針を閣議決定しました。沖縄、南西諸島の軍事要塞化はすすみ、この世界に核兵器はありつづけています。差別や性暴力、それらはなくなるわけがないと、あきらめの対象にさえなっています。

大きな力によって押し流され、身近な暴力さえ否定することができなくなり「しょうがない」という言葉のもとに忘却されていくのならば、やはりそこに抵抗しなければなりません。大江健三郎は「核時代に、想像力を頼りに生きていく」と書きました。わたしは、彼の言葉に連なりながら、暴力の時代に、言葉を頼りに生きねばならないと思います。

対話もまた暴力になりうる、とひとは言うかもしれません。もちろん言葉の暴力というものがあります。さまざまな理由で対話がむずかしい状況にあるひともいます。ですが、それがすなわち対話がすべて暴力であるということの意味しません。対話もまた暴力的だ、と結論づけてしまうことは簡単です。では、そうではない対話とは何なのかを考えるのが、わたしたちにできることなのでしょう。

戦争について対話をする場を持った帰り道、共に場づくりをしている写真家で友人の八木咲さんの言葉が忘れられません。場の中で、対話もまた暴力になりうるのではないかという発言があった日でした。彼女は、こう言いました。

「暴力はひとを幸せにすることはできない。言葉は傷つけるかもしれないけれど、ひとを幸せにすることはできる」と。

そう、言葉は、対話は、暴力も大きいのです。暴力には持っていないものを持っています。言葉は、暴力よりもずっと広く、深いのです。だからわたしにはやっぱり、暴力に抗することを、あきらめることができません。

対話は、ただ特定の人のためだけの安心安全な逃げ場ではないはずです。もちろんそれがまずは必要な場もあります。ただ、もっと共に生きるというところまで、手を伸ばしてもいいのではないのでしょうか。

対話は、暴力でない仕方で、対話を拒む社会

に緊張をつくりだします。これしかない、という道に、「本当に？」という問いを投げかけます。わからなさに身をひらき、それでももがくように、言葉を、言葉で探すのです。

しかし当然ながら、対話をひらいているだけでは、暴力に抗することはできません。ロシアがウクライナに侵攻した日も、わたしは対話の場をひらいていました。イスラエル軍が、ガザに大量の爆弾を降らせている日も、わたしは対話の場をひらいていました。あの時間が無力なのだと言い切ることはしません。ただあまりに草の根で、あまりにはかりがたく、あまりに空をかくような試みです。対話は不可欠にもかかわらず、それだけでは不十分なのです。

困難さがあるような地域や場所に、直接行くこともあります。そこで数時間の対話の場をひらいたとしても、困難さは残り続けます。これは事実です。ただ、苦しみはありますが、卑下し続けてはならないとも思います。

対話しようとする、競争の論理の中で生きるのではなく、共に考えようとする。それは暴力に抗することです。人々の声をきくと、他者が、ただの他者ではなく、ひとりの人間として立ち現れます。すると、きかないではいられなくなります。見ないではいられなくなります。よく見て、よくきくことは、わたしを変えてしまいます。互いを変えてしまいます。でもわたしたちはずっとそうやって社会をつくりつづけてきたはずなのです。

だから、共に考えるという行為は、共に行動する構えをつくるとも言えます。世界に根差しながら、世界を見ようとする、あるいはきこうすることは、過去から手渡されるものをおそれながら受け取り、未来に自らを投げいれながら、同時代を生きることに思われるからです。

わたしは、本の世界にのみ生き、ひとりきり

で世界をただ見ようとしていました。それが哲学だと思っていました。でも、わたしがしたいのは、そういうことではありませんでした。世界を見ると、わたしがつぐられ、変わっていきます。見ることは、変わることであり、変えることでもあるのです。言葉にすると、世界がひらき、奥行きを見せます。行き止まりだと思えていたものは、息を吹き返します。すでに共に生きている他者と共に、また生き直そうと世界を変革する主体になります。このとき、哲学は、空事ではありません。

小さなものらに、老人は答えない、  
私は生き直すことができない。しかし  
私らは生き直すことができる。

これは大江健三郎さんの詩の一節です。本の世界に生きることもまた、他者によって手渡された言葉を生きることです。過去の声に耳をすませ、目の前の他者とききあうこと。わたしたちはひとりでは生きられません。ひとりで考えることも、ひとりで暴力の誘惑に抗うことも、ひとりで表現することも、ひとりで生き直すこともできません。ですが、他者と共になら、できるのだと、教えられました。

だから、このように言って、この場を締めくくりたいと思います。

共に生きるために、共に生きましょう。

<第17回「わたくし、つまり Nobody 賞」  
受賞記念講演「暴力に抗して」(2024年  
3月27日)をもとにリライトしました>



### 永井 玲衣

哲学者・作家。人びとと考えあう対話の場を各地でひらいている。詩と植物園と念入りの散歩が好き。著書に『水中の哲学者たち』(晶文社)『世界の適切な保存』(講談社)。第17回「わたくし、つまり Nobody 賞」受賞。